

文春文庫

冥府回廊

(上)

杉本苑子



文藝春秋



文春文庫

224-7

冥府回廊(上)

定価はカバーに
表示してあります

1985年2月25日 第1刷

著者 杉本苑子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-722407-0

文 春 文 庫

冥 府 回 廊

(上)

杉 本 苑 子



文 藝 春 秋

冥府回廊（上）
目次

第一章
7

第二章
77

第三章
145

第四章
219

冥府回廊（上）

第一章

I

すこし眩^{まぶ}しすぎるほどだった秋の日ざしも、午後四時を回った今は絹濾^{きぬご}しされたように和^{やわ}ら
いで、海からの微風^{くちもと}がほてった頬にこころよかった。

房子^{ふさ}の口許^{くちもと}に、ほほえみが泛^うかんだり消えたりした。抑えようとする意志の力と、こみあげ
てくる可笑^{おか}しさとの、それは小さな葛藤^{かつとう}を示すものだが、とうとうたまらなくなって彼女は笑
い出してしまった。

「変った人だわ。名前もだけど、あのかた自身とても風変りな生まれつきなのね」

つぶやきに、しかし非難の色は無かった。むしろ想念^{たの}を愉^{たの}しんででもいるかのような語気の
弾^はみがうかがえた。海に向かつて放たれた眸^{ひとみ}はきらきら輝いて、そのくせ海を見ているわけ
もない。岩崎桃介^{ももすけ}——。網膜^{まな}に灼^やきつけた一人の若者の姿を、これまた想念の中で、しきりに

房子は追っていたのである。

熱い高揚感が身体を満たし、彼女を一種の酩酊状態におとしいれていた。

(恋だ。とうとうあのかたに、恋してしまった)

はつきり自分でも気づいているだけに、母や姉に顔を見られるのが恥かしい。つれ立って帰宅はしたものの座敷へはあがらず着替えもせず、晴れ着のまま敷き石を踏んで、房子は裏庭へ廻り込んだ。生垣の下からすぐ、なだらかな崖になり、低い家並みの向こうに芝浦、高輪、品川の海を一望できるこの、庭の隅は、幼いころから房子の気に入りの場所だった。茶畑と自家用の菜園しかない殺風景な一劃だけに、馬丁の金之助が時おり野菜の手入れにくるほかは、福沢家の家族すらめつたにここへは立ち入らない。どこよりも眺めがよく、しかもどこよりも静かな、考えごとをするには打ってつけの、忘れられたような角地なのであった。

しばらくここに佇んで、気持の昂りを房子は鎮めたかった。興奮しているのは、でも彼女だけではない。一時間も前に遊戯会は終わったのに、まだ運動場の空には時おり未練がましく狼煙があがるし、あと片づけに精を出しているらしい塾生や塾僕たちの喚声が、関の声さながら打ち寄せてきていた。

うやうやしくテント張りの招待席に案内された来賓だけでも三百五十余名……。そのほか、府下在住の慶応義塾維持社員、学生生徒の父兄など縁故者ばかりか、

「今日、山の上の学校で、面白い催しがあるそうだぜ」

「行ってみろ」

と構内に入りこんで来た近所の者、通りすがりのヤジ馬まで合せると五千人にも及ぶ大人数が、生徒たちの運動競技に熱狂したのだ。

興奮の余波は色濃くあたりに漂っていたし、日ごろ、貧弱な塾生たちの購買力に縋^{すが}って、彼らのふところに見合う貧弱な品物を並べているにすぎない商家も、今日ばかりは軒並み活気づき、中にはお祭礼の提灯^{ちようちん}を景気よく庇^{ひさし}にぶらさげた店さえある。

楽隊の奏樂が終日、鳴りひびき、打ちあげ花火が炸裂^{さくれつ}して、そのたびに煙の中から一文取りの布袋^{ほてい}や亀の子、金魚、弥次郎兵衛、ピエロ人形など子供のよろこびそうな玩具^{おもちゃ}が飛び出し、群衆の頭上に降りそそいだ。

着飾った奥方だの令嬢をともない、二頭立て四頭立ての馬車を駆^かって、朝野の名士が往来するなどという華やかな光景も、普段めったに目にできるものではない。さすがにもう、馬車は一台も見えなくなったが、房子が視線を崖下に落とすと、狭い三田通りは帰路につく人々でまだ相変わらずごった返している。慶応義塾を中心に朝から夕近い今まで、秋晴れにふさわしい明るい熱気が、三田の台地を上も下もまんべんなく揺り動かしつづけた賑^{にぎ}やかな一日だったのである。

つまりいえば運動会だ。しかし体育競技の開催を『運動会』と呼ぶようになったのはもう少しあとからだ。運動、もしくは運動会という言葉はすでに使われてはいたけれど、たとえば競技とは無関係な集会や、旗行列たいまつ行列といった催し全般を『運動会』と称していたのであった。

房子の父の福沢諭吉が、現在、社頭しゃとうの地位にいて経営を切り回している慶応義塾も、一年のうち春秋二回、これまで遠足会をおこなってきた。全校生徒が腰に握りめしの包みをくくりつけ、徒歩で飛鳥山あすか、あるいは多摩川堤などへ出かける。そして目的地に着くと、そこで綱引き、角力すもう、源平に分れての棒倒し、旗奪いといったごく素朴な競技を演じ、郊外の陽光を満喫しつつ帰るのである。

ピクニックと運動会を兼ねたようなものだが、今年——明治十九年からこの遠足会をとりやめて、学校の運動場で遊戯会を開くことになった。

「諸君、福沢先生の教育法は、たんなる智育徳育にとどまらず、体育を重視する点にその特色を有している。だから見たまえ、わが慶応義塾には府下の諸学校に比較して病人が少い。多年の成果が歴然と現れているのだ」

そう言つて仲間を糾合きゆうごうしたのは、清岡邦之助という塾生だった。

「聞くところによると外国の学生生徒は、戸外の運動競技でその技をきそい、速さ高さ強さによつて優劣を判定し、成績優秀な者には賞状賞品などを授けて体育の向上に資しているという。当塾の教育方針とも一致するものだ。導入の是非を学校当局に諮はかつてみようじゃないか」

「賛成賛成、僕はさっそくロイド先生はじめ外人教師に訊きき合せて、競技種目や練習の方法、開催の仕方など詳細を教えてもらつてくるよ」

岩崎桃介がまっ先に同調し、いわば生徒間の発議で動き出した案なのだが、

「よかろう。やつてみたまえ」

福沢社頭も快諾してくれたため、この春、小規模ながらはじめて『遊戯会』の名称で計画を実行に移してみた。場所は三田の構内であった。

さいわい山上には、校舎の北側に広大な空地が広がっていた。幼稚舎に学ぶ年少の生徒のために、シーソーやブランコ、すべり台などが置かれ、運動場とよばれているこの空地は、慶応義塾の敷地全体がもと島原藩の中屋敷だった旧幕時代、藩士らの馬場に使用されていたところで、周囲を気持よく松の疎林がかこんでいる。

これも島原藩邸のころから斎いづかれていた稲荷いなりの小祠しょうしが、東に寄った岡の上にあり、あたりは稲荷山の名で親しまれて、塾生たちのこの上ない散策の場所にもなっていたのである。

第一回目の遊戯会はこの運動場でころみられ、一応の成功を見た。運営のコツがわかったし、種目の選定、タイムの取り方なども呑みこんで、今日、第二回目の秋季大会開催に漕ぎつけたわけだった。

春の催しときは塾生の主導に委せた学校当局も、今回は大々的に計画に加わって、遊戯会を向後、学校の年中行事の一つとして定着させようとの気構えを見せた。

おびただしい招待状を印刷して各界にばらまいたり、特設の来賓席に陣取った紳士淑女連には極上の仕出し弁当を、さらに昼食持参を原則とする父兄や維持社員らの一般席にも湯茶はもちろん、大福、ドロップス、せんべいの袋を配るなど出資を惜しまず、いやが上にもお祭り気分を盛りあげたのである。

築地の鉄砲洲てつぱうず、ついで芝の新銭座、そして再び鉄砲洲、新銭座と移転をくり返し、ついに現

在の芝三田に拠点を占めるに至るあいだ、たえず校舎、設備、敷地を増やし、塾生や教師の増加を見つづけてきた慶応義塾も、明治四年あたりからその維持が苦しくなり、経営状態に翳^{かげ}りが見えだした。

廃藩置県のしわ寄せで、士族の子弟への公費支給が廃止された結果、私塾への入学希望者に齒どめがかかったこと、明治九年、徴兵令が改正され、学生たちへの徴兵免除の特典が無くなったこと、加えて西南戦争後の物価騰貴など原因は幾つか挙げられるが、おかげで生徒数が激減……。慶応義塾は支出が収入を上回って、経済的に破綻^{はたん}に瀕しかけたのであった。

「この窮地、何としてでも切りぬけねばならん」

持ち前の活力とねばりを發揮して、諭吉はさまざまな学内改革をこころみ、打開の道を探るべく奔走したけれども、事態は好転のきざしすら見せない。

とうとう万策つきて、借金嫌いの諭吉が政府に補助を申し入れた。明治十一年——。年の暮れである。

「維新以来、当塾が日本の教育界に貢献してきた功は大きい。このさい政府が何らかの救済措置を講じるのは当然と思う」

すなわち無利息ならば二十五万円、低利をつける場合は四十万円、向こう十カ年の期限を切って借入したいと願い出たのだが、政府部内に異論が百出し、半年たっても許可がおりない。

一方では徳川家、島津家など旧大名にも諭吉はさかんに働きかけた。でも、いずれも不調に終り、さしもの諭吉が、

「やむをえぬ。塾を閉鎖するほかあるまい」

とまで言い出すありさまとなった。

「月々、千円あればどうにか維持はできるのだよお錦^{きん}。どうやりくりしても、残念ながらその千円が蹴^け出^だせない。三、四百円、かならず不足分が出てしまうのだ」

泣きごとを口にしない日ごろには珍しく、母を相手に、諭吉が苦笑まじりにこぼしていたのを、房子も耳にしたおぼえがある。

教職員らは自発的に給料の減額を申し出、諭吉自身は無給で、どころか毎月の欠損分を手許から補充しつつ困難な経営をつづけたけれども、やがてそれにも限界がきた。

「閉塾、解散……」

涙をふるっての宣言に驚愕^{きょうがく}し、奮起したのは卒業生たちだ。「塾をつぶすな」を合言葉に彼らは維持社中を結成——。おのおの手蔓^{てづる}をたぐり有志の寄附を仰いで、総計二万数千円に及ぶ浄財をかきあつめたのである。

義塾最初の募金運動だが、危機はこの金でどうやら回避できた。状況もそれ以降はよい方向かい、徐々にではあるが塾生の数もふたたび増加しはじめて、明治十七、八年には千名を突破するまでに回復した。不安材料はなくなり、経営は確実に軌道に乗って、ことし初頭からは待望ひさしかった煉瓦講堂の建設にも着手しはじめている。

これは諭吉の古くからの知己^{ちき}であり、東北小真木銀山の出資者でもある中村道太という富豪が、気前よく一万円、寄附してくれたおかげで取りかかれた建物だが、ともあれここへ来て、

前途への展望はようやく明るくひらけたのであった。

今日の盛大な遊戯会の開催は、とりも直さずその喜びの、社中をあげての表出にほかならない。煉瓦講堂の起工式までを兼ねた催しだったから、玩具入りの花火ぐらい景気づけに何発打ちあげたところで怪しむに当たらないが、そんな中でひととき異彩を放ったのが、岩崎桃介の運動衣だったのである。

2

八百ヤード、二百ヤードの徒歩競走、障害物競走、英尺にして九尺一寸の竿飛び、同じく英尺で十四尺三寸の幅飛び、土囊どのおうを肩にかついで走る戴囊たいのおう競走、幼稚園生徒の演じるかわいらしい集団ダンス、柔軟体操や旗拾い競走、はては来賓によるかけっこまで、種目もそれに要する道具も、まがりなりにスポーツ競技の体裁はととのえたし、言い出しっぺの清岡邦之助が竿飛びで一等をとったのをはじめ、塾長の小幡篤次郎が壇上から入賞者に渡す賞状、賞品など、諸外国の運動会にくらべてすら、さして遜色そんしよくないくらいこまごまと用意したにもかかわらず、肝腎の服装には思い及ばなかった。

市販のユニフォームなどむろんありはしない。塾生たちはめいめい好き勝手な身なりでグラウンドになだれ出た。そのほとんどは縮みかキャラコのシャツだった。中には和服に襷たすき掛け、袴はかまの股立ちももだを高く取るといふ古典的ないでたちや、着流しの裾を尻からげし毛脛けすねをむき出すといういささか野蛮なスタイルも混ったが、桃介一人はまっ白な買い立てのシャツの背に、ラ

イオンの絵を背負って登場したのである。

「まあ、ごらんなさい母さま、岩崎さんでしょ？ あの人……」

目ざとく見つけて、諭吉夫人お錦の袂を強く引いたのは福沢家の長女里子であった。

「そうね、桃介さんだわ。水ぎわ立った男ぶりなので、すぐわかりますよ」

「ご様子もだけど、シャツよ、ほら、あのかたのお背中に絵が描いてあるじゃありませんか」
「ほんとうだ。まさか染めたのではなからうね。何の絵だろう」

「ライオンよ。鬘のある雄ライオンの首だわ」

「奇抜なことをする人だ。でも目立つねえ、背丈のすらりと高い好男子が、ライオンのシャツを着て走り廻るなんて……」

「婦人連はみな、桃介さんの動きに見とれてますよ。それを計算して絵入りのシャツなんか作ったのだとしたら、なかなか隅に置けない策士ねえ、あの人……」

あたりは喧騒の渦である。声を張り上げなければ隣席とさえ話が通じにくい。しかしそれにしても姉と母の会話は大きすぎた。声の強弱よりも、聞かせようとする意識が言外にこもった話ぶりなのだ。

（だれに？）

自分にだ、と気づいているだけに、房子は席に居たたまれなかった。里子よりもじつはもっと早く、彼女は桃介に気づいていた。その背のライオンにも目をとめて、
（なぜ、あんなに派手なことをなさるのか）